「まんがで身につく　ずるい考え方」



著者：木村　尚義
出版：株式会社　あさ出版
発行：2021年１月18日

ただのマンガと侮ることなかれ！

本書は、10年前に刊行された「ずるい考え方～ゼロから始まるラテラルシンキング入門～」（著者同じ）を基に、内容をアップデートし、マンガ化しながら解説文も合わせて構成されており、ラテラルシンキングを実際の仕事や人間関係などでどう活用するかについてわかりやすく紹介されている。

タイトルの「ずるい」という言葉だけをみると良くない意味に聞こえるが、ここで言う「ずるい」とは、「ルールを犯さず最小の力で最大の効果を出す」という意味である。日本では古くから一休さんのトンチ話で知られる考え方に通じるもので、これが別名「ラテラルシンキング」とも呼ばれている。

【ラテラルシンキングの具体例】

①　「トム・ソーヤーが他者の力を借りる」

ある日トムは塀のペンキ塗りを言いつけられるが、やりたくないトムは名案を思いつく。それはいかにも楽しそうにペンキ塗りをすることだった。はじめは冷やかしていたトムの友人たちだったが、あまりにトムが楽しそうなので、やりたいと言い出す。しかし、トムはわざとそれを拒む。するとますますやりたい気持ちが高まり、友人たちは先を争うようにペンキ塗りをはじめ、結局あっという間に作業は終了した。

②　「むしろ空いていること」

阪急電鉄の前身、箕面有馬電気軌道や阪急デパート、宝塚歌劇団などの創始者小林一三は、箕面有馬電気軌道の沿線が着工時、乗客があまり見込めない土地だったが､「宝塚新温泉」や「宝塚歌劇団」の前進となる劇団をつくってこの土地に魅力を生み出し、また、これまで辺鄙な場所と言われていたところを「都心から離れていて静か」「環境の良い土地」であると肯定的なイメー

ジで宣伝し、住宅を造って人を集めることに成功した。

③「チラシを配らずドーナツを配る」
クリスピー・クリーム・ドーナツが店をオープンする時に考えた宣伝方法は、オフィス街でチラシを配るのではなく、12個入りのドーナツを無料で配ることであった。一人では食べきれない数を渡すことが、家族や友達、オフィスの同僚など他の人に分けることになり口コミ効果を狙った。

これ以外にも、多くの具体例を紹介しながら、ラテラルシンキングへの理解を深め、実際に取り組む方法について述べられている。
ラテラルシンキングには、ロジカルシンキングのようなメソッドは存在せず、コツはマネをすることから始まる。数多くの具体例を見て、マネをしているうちに成功パターンをなんとなく見つけることができるようになり、言ってみれば自転車の補助輪のようなものである。繰り返し乗ることで、コツを身体が覚え、補助輪を外して乗れるようになるというように、意識して考えることを繰り返すうちに意識せずに考えられるようになる。

さらに、ラテラルシンキングはロジカルシンキングと相互補完の関係である。ラテラルシンキングで思考の枠を広げ、ロジカルシンキングで倫理的に可能であるのかなどバランスを取ることで、新しい発想を呼び込むことができるのである。その先に、視点を変え、物事の本質を明らかにし、抽象化する力を身に付ける事につながる。

ラテラルシンキングはトレーニングが不可欠で、すぐに使いこなせるわけではないが、ロジカルシンキングのみや常識にとらわれた中では決してたどり着くことのできない着眼点や発想を得ることができる。この発想法が身につけば、ビジネスの場面だけでなく、あらゆる場面に役立つと思われる。

起業教育研究会　企画委員
奈良県立奈良情報商業高等学校
奈良県立商業高等学校
校長　谷口　達之輔